佐久市埋蔵文化財調査報告書　第129集

戸坂遺跡群

TOSAKA

戸坂遺跡Ⅲ

長野県佐久市新子田戸坂遺跡Ⅲ発掘調査報告書

2005. 2

東京電力株式会社

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第129集

戸坂遺跡群

TOSAKA

戸坂遺跡Ⅲ

長野県佐久市新子田戸坂遺跡Ⅲ発掘調査報告書

2005. 2

東京電力株式会社

佐久市教育委員会

例　言

1　本書は、東京電力株式会社が行う南佐久線№15～25鉄塔建替工事に伴う、埋蔵文化財発掘調査のの調査報告書である。
2　調査委託者　　東京電力株式会社
3　調査受託者　　佐久市教育委員会　　高柳　勉
4　遺跡名及び発掘調査所在地籍
　　戸坂遺跡群　戸坂遺跡Ⅲ（ＡＴＳⅢ）
　　（1）　№22鉄塔（南側）　佐久市大字新子田字道端961-1
　　（2）　№20鉄塔（中央）　佐久市大字新子田字星谷端979
　　（3）　№18鉄塔（北側）　佐久市大字新子田字戸坂1090-2
5　調査期間及び面積
　　調査面積
　　（1）　83.64㎡　（2）　90.45㎡　（3）　88.44㎡　合計 262.53㎡
　　調査期間
　　平成16年７月26日～平成16年８月18日（現場作業）
　　平成16年８月19日～平成17年２月28日（整理作業）
6　調査担当者　　出澤　力　　佐々木　宗昭
7　本書の執筆、編集は出澤が行った。
8　本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺跡の名称　　戸坂遺跡Ⅲ
2　今回調査した３つの調査対象区について、南から１～３の番号を与えている。
3　遺構の略称は、以下の通りである。
　　竪穴状遺構－Ｈ　堀立柱建物址－Ｆ　土坑－Ｄ　ピット－Ｐ
　また、１－Ｈ１とあれば、前の数字は調査区の番号を表し、この場合第１調査区のＨ１号住居址と言う意味となる。
4　縮尺は、竪穴住居址・堀立柱建物址－１／80、土坑－１／60、遺物－１／４とし、異なるものは図中に明記してある。
5　遺構の海抜標高は、水糸標高を「標高」として記してある。
6　写真図版中の遺物の縮尺は概ね挿図と同じである。また、写真図版と挿図の№については同一である。
7　住居址の面積は床面積（住居址下端範囲）を測定し、炉部分は測定値より除外してある。また、住居址は完全なプランを残さないため、測定値は調査部分のみの数値となる。堀立柱建物址は、四隅の柱穴に囲まれた範囲を測定する。
8　挿図中における土器断面の塗り潰し表現は須恵器断面を意味する。また、挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを意味する。

　焼土範囲　　 　赤色範囲

目　次

例　言
凡　例

第１章　発掘調査の概要
第１節　調査の経緯 …… (1)
第２節　調査組織 …… (2)
第３節　調査日誌 …… (2)
第４節　遺跡の立地と歴史的環境 …… (2)
第５節　基本層序 …… (5)
第６節　調査の概要 …… (5)

第２章　遺構と遺物
第１節　No.１調査区 …… (7)
Ｄ１号土坑 …… (7)

第２節　No.２調査区
Ｆ１号掘立柱建物址 …… (8)
Ｄ１～４号土坑 …… (8)

第３節　No.３調査区 …… (10)
Ｈ１号竪穴住居址 …… (11)
Ｈ２号竪穴住居址 …… (12)
Ｈ３号竪穴住居址 …… (14)
Ｆ１号掘立柱建物址 …… (16)
Ｄ１号土坑 …… (16)　Ｄ２号土坑 …… (16)
Ｄ３号土坑 …… (16)　Ｄ４号土坑 …… (16)
Ｄ５号土坑 …… (17)　Ｄ６号土坑 …… (18)

遺構一覧表・遺物観察表 …… (18)

第３章　まとめ …… (20)

写真図版

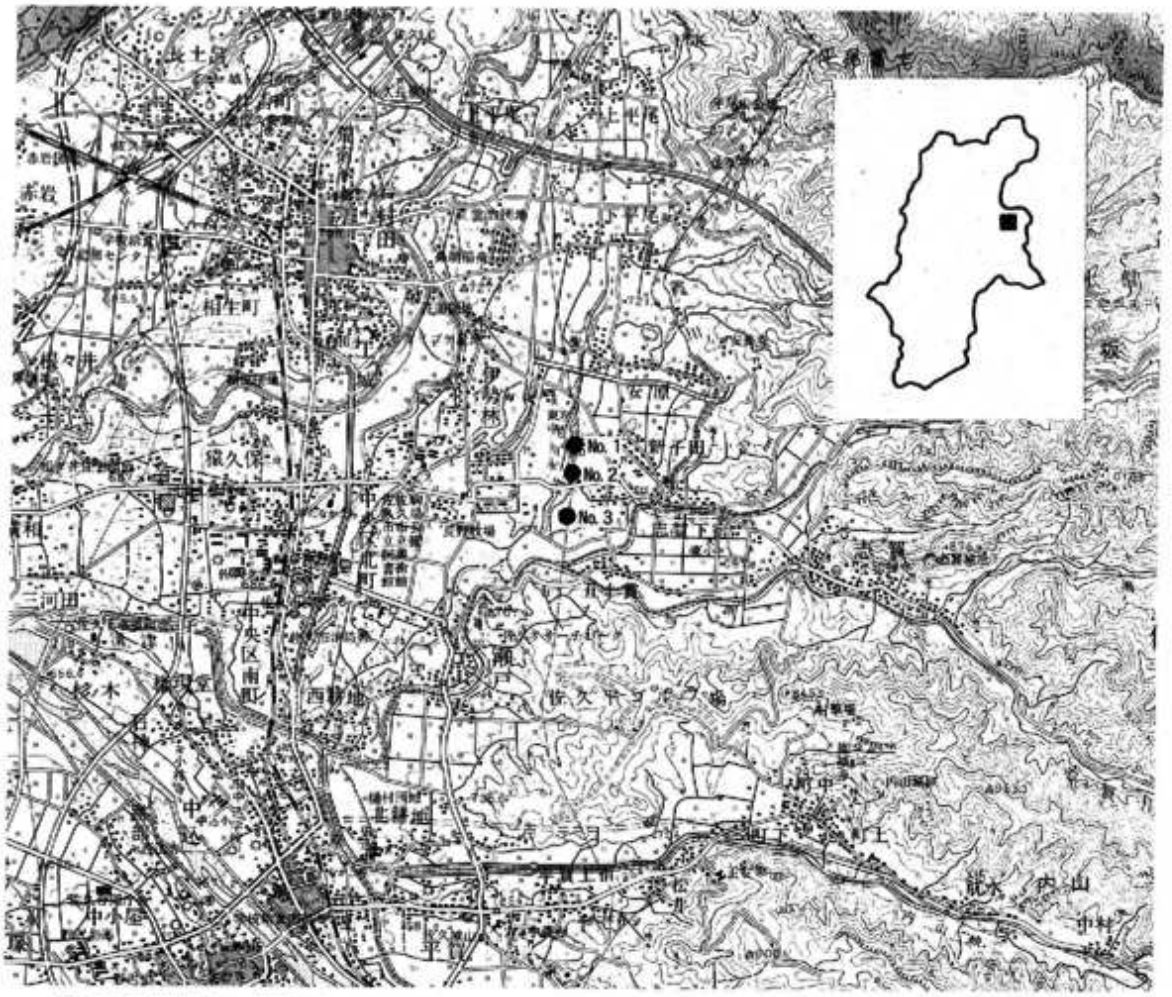
奥付

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査の経緯

戸坂遺跡群戸坂遺跡Ⅲは佐久市大字新子田字戸坂、星谷端、道端に所在する。当地は湯川東岸に接する浅間軽石流堆積物による台地上の東端に立地し、標高は703～4m内外を測る。周辺では本遺跡の他にも発掘調査が行われており、本遺跡に隣接する戸坂遺跡Ⅰ・Ⅱ、本遺跡から北東に供養塚遺跡、四ッ塚遺跡Ⅰ・Ⅱ、四ツ塚古墳の他、更に向こうに権現平遺跡や池端城跡、北西側には高師町遺跡と言った遺跡が調査をされている。

今回、東京電力株式会社により鉄塔建替工事が行われることとなり、№18・20・22号鉄塔の建替について、対象地が戸坂遺跡群内に立地し各対象地が極めて小規模な範囲であることから、試掘調査は行わず、対象地の表土を除去後、各鉄塔部分計３箇所について記録保存を目的とした発掘調査が行われることとなった。



第１図　戸坂遺跡Ⅲ　位置図（１：50,000）

第２節　調査組織

◎発掘調査受託者　佐久市教育委員会
　教育長　高柳　勉
◎事務局
　教育次長　赤羽根寿文
　文化財課長　小林　正衛
　文化財係長　高村　博文
　文化財係　林　幸彦　須藤　隆司　小林　眞寿　羽毛田卓也　雷沢　一明
　上原　学　赤羽根太郎　出澤　力

◎調査体制
　調査担当者　出澤　力
　調査主任　佐々木宗昭　森泉かよ子
　調査員　阿部　和人　市川　昭　上原　幸子　加藤　美雪　柏木　義雄
　菊池　喜重　小林　幸子　小林　妙子　小林百合子　小山　功
　高見沢　綾　田中ひさ子　中島とも子　中条　悦子　橋詰　勝子
　羽出　貴恵　林　美智子　武者　幸彦　百瀬　秋男　森角　雅子
　柳沢　孝子　山村　容子

第３節　調査日誌

平成16年７月26日　器材搬入を行う。対象地№１について、重機による表土削平を行う。
　７月27日　対象地№１の調査終了。重機による埋め戻し。
　７月29日　対象地№２の表土削平。調査開始。
　８月２日　対象地№２調査終了。対象地№３の表土削平、調査開始。
　８月３日～　対象地№３調査。Ｈ１～３号竪穴住居址、Ｆ１号堀立柱建物址、土坑、ピットなどを調査する。
　８月５日　雨天により室内作業。
　８月９日　対象地№２の埋め戻し。東京電力の方３名が現場にて作業体験。
　８月18日　対象地№３埋め戻し。器材を撤収し現場での作業を終了する。
　８月19日～平成17年２月28日
　室内整理作業。遺物洗浄、注記、接合、図面修正、版下作成、報告書編集を行う。

第４節　遺跡の立地と歴史的環境

戸坂遺跡Ⅲは湯川左岸に展開する軽石流堆積物により形作られた平坦な台地上に存在する。台地にはいわゆる田切り地形も見る事が出来、田切りの帯状台地上には弥生時代以来の住居址等遺跡の分布が見られる。

本遺跡は台地の河川に面した端部に存在し、台地上に分布する遺跡群のひとつ戸坂遺跡群内にある。遺跡群周辺には他にも遺跡が認められ発掘調査も行われており、この台地上における集落の様相、変

遷などについて知ることが出来る。ここでは、本遺跡周辺の遺跡分布について図で示し、発掘調査が行われた遺跡について述べ本遺跡の歴史的環境を概観したい。

戸坂遺跡群の東方、台地の平坦部と佐久の東部山地から続く丘陵部の境にある**権現平・池端遺跡、池端城跡**では縄文・古墳・奈良・平安時代の住居址、土坑が発見され、また中世の竪穴状遺構、土坑、ピット、井戸址が認められている。丘陵部は縄文時代ではそこを生活空間として、また中世になるとその地形は山城などとして利用される事が窺える。

本遺跡の北西には出切りの帯状台地上に展開する**池畑遺跡、西御堂遺跡、高師町遺跡**IIがある。池畑遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭と思われる住居址が認められ、その他の遺跡では古墳時代から奈良・平安時代、中世に至る遺構が確認される。本遺跡から北東にあたる**宿上屋敷遺跡、下川原遺跡・光明寺遺跡**においても古墳時代～中世にあたる遺構があり、台地上の平地部では弥生末から中世に渡り集落が営まれていたことが分かった。

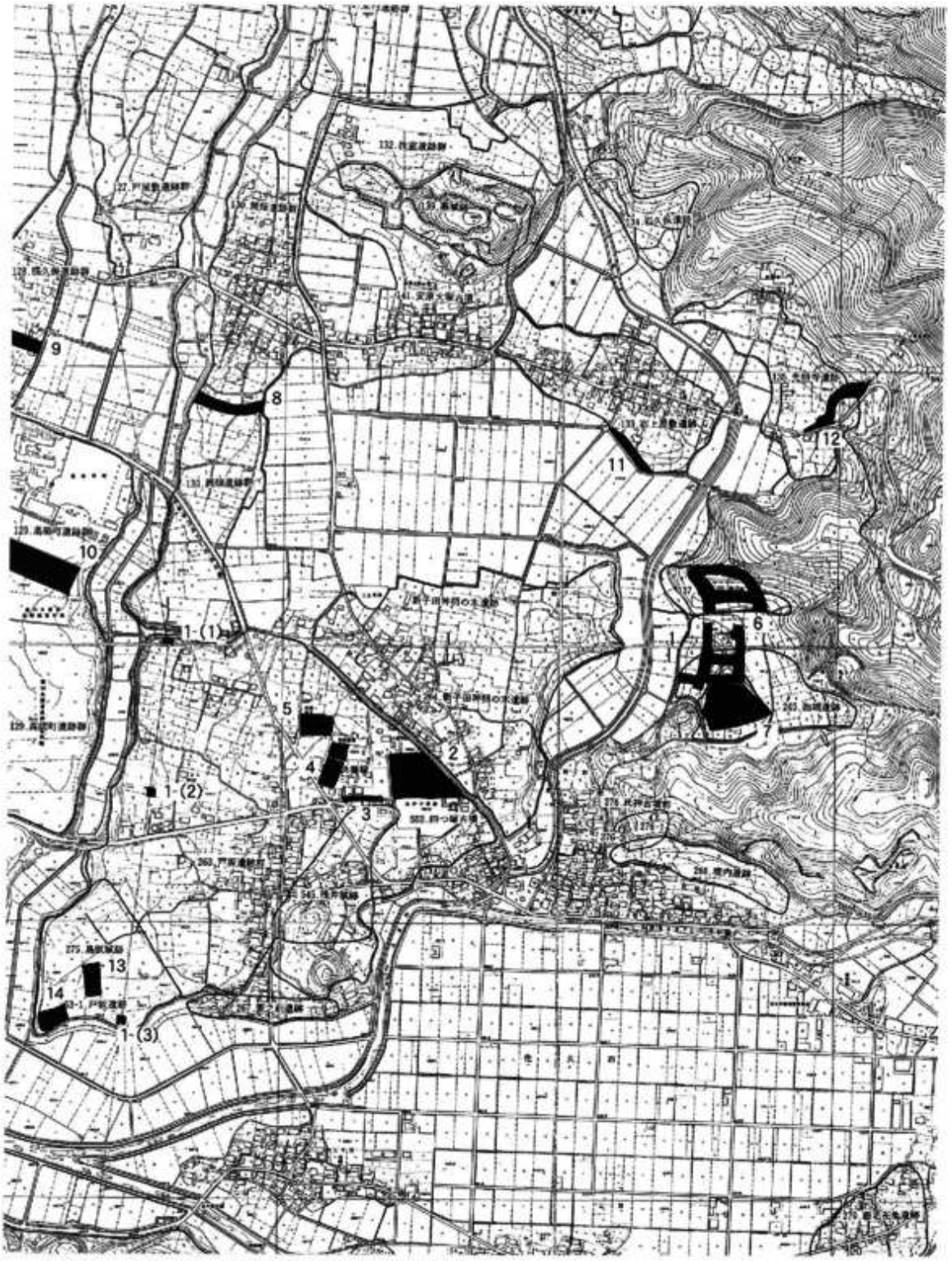
戸坂遺跡群内では近年**四ツ塚遺跡**I・II、**供養塚遺跡**I・IIが調査された。発掘されたのは古墳時代の住居址、奈良時代の住居址、堀立柱建物址、中世の溝状遺構、そしてその大半を攪乱されていたが古墳1基である。戸坂遺跡群内で発掘された遺構は周辺の台地上に存在する遺跡の様相と合致し、特に、奈良時代集落が当地周辺に展開する事を示している。

本遺跡No.3調査区に隣接して調査された**戸坂遺跡**Iでは弥生時代後期の住居址1軒と平安時代の住居址3軒が確認されている。また昭和59年に調査された**戸坂遺跡**IIでは縄文時代中期の住居址2軒、平安時代住居址3軒の他、環濠と思われる検出長40m、幅2m内外の弧状に伸びる溝状遺構が確認され、弥生時代後期後半の出土遺物が発見されている。香坂川を南に望み、西側を田切りによって切られるこの台地上には、縄文時代から弥生時代、そして平安時代にいたるまで集落が営まれていたことが窺える。

四ツ塚遺跡や**供養塚遺跡**においては古墳時代と奈良時代の遺構がそのほとんどであるのに対し、**戸坂遺跡**I・IIでは縄文や弥生時代の住居址をはじめ平安時代の住居址も認められる。台地を広範に調査した例がないため断言は出来ないが、特に弥生時代については、集落址は台地南側縁辺において営まれていたと考えられる。

No.	遺跡名	所在地	調査年度	備考
1	戸坂III	新子田	H16	今回調査。
2	四ツ塚I	新子田	H10	H5軒(奈良)・竪穴状遺構2軒・F1軒・土坑10基・溝2条・古墳1基
3	四ッ塚II	新子田	H11	H2軒(古墳)・F1軒
4	供養塚I	新子田	H10	H2軒(奈良)・F1軒・溝1条
5	供養塚II	新子田	H15	H1軒(奈良)・F1軒・土坑4基
6	権現平・池端	新子田	H6	H23軒(縄・古・平)・竪穴状遺構10軒・F1軒・D48基・溝2条・井戸址2基
7	池端城跡	新子田	H7	竪穴状遺構56軒(中世)・H6軒(縄・古・平)・D28基・溝5条・井戸址1基
8	池畑	安原	S60	H2軒(弥生～古墳)・溝2条・D1基
9	西御堂	安原	S60	D2基
10	高師町II	新子田	H7・8	H24軒(平安)・竪穴状遺構5軒(中世)・F19軒・D50基・溝7条
11	宿上屋敷	安原	S62	H6軒(古・平)・D9基・特殊遺構3基
12	下河原・光明寺	安原	S61	竪穴状遺構1軒(中世)・D3基・溝3条・井戸址2基
13	戸坂I	新子田	S46	H4軒(弥生・平安)
14	戸坂II	新子田	S59	H5軒(縄文・平安)・環濠跡

第1表　周辺調査遺跡一覧表

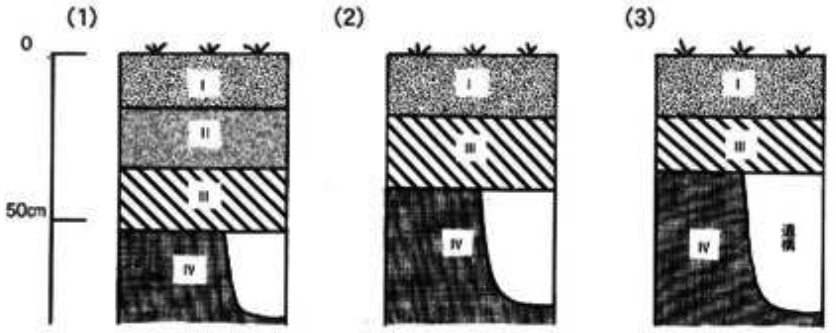


第３図　戸坂遺跡Ⅲ　周辺遺跡分布図（１：10,000）

第５節　基本層序

今回の調査では計３点の調査区が設定されており、それらはおよそ標高703～4m内外を測っている。本遺跡は前述の通り湯川左岸に展開する台地上に存在し、この台地では浅間山の火山活動によって堆積したローム層が地表下から認められる。今回の調査では表土である耕作土を除去したローム層Ⅳ層が遺構確認面である。

各対象地の基本層序を柱状図にして下に示した。



基本層序　土層説明

Ⅰ．耕作土層。
Ⅱ．暗褐色土(10yr3/4)　ローム粒子含み、軽石を微量に含む。
Ⅲ．黄褐色土(10yr5/6)　ローム粒子多量に含み、軽石を多く含む。
Ⅳ．明黄褐色土(10yr6/8)　地山ローム層。遺構確認面。

第４図　基本層序柱状図

第６節　調査の概要

今回確認された遺構・遺物は以下の通り。それぞれ各調査区ごとに記してある。

○No.１調査区

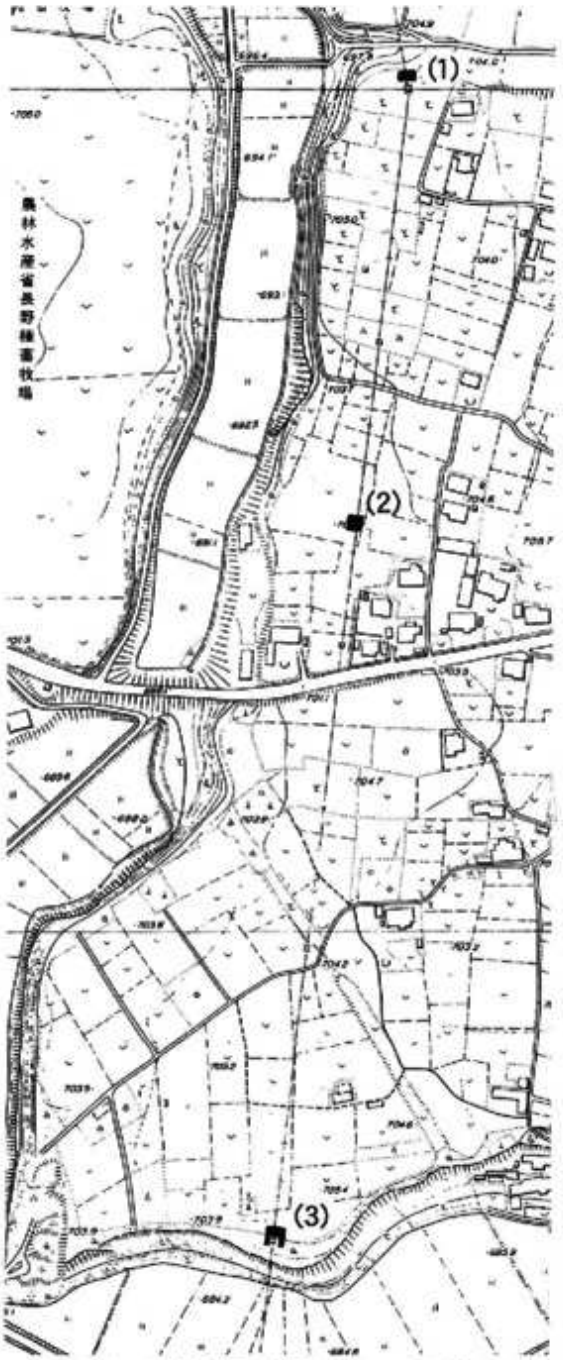
遺　構　　土坑１基　ピット１基
遺　物　　須恵器（短頸壺・蓋）　土師器甕

○No.２調査区

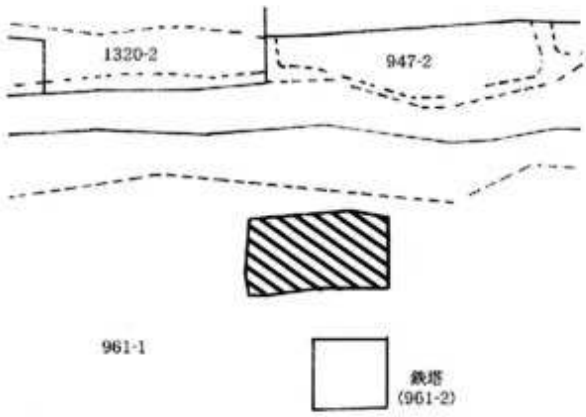
遺　構　　土坑４基　ピット36基
遺　物　　須恵器（坏・高台付坏・甕）　土師器（坏・甕）

○No.３調査区

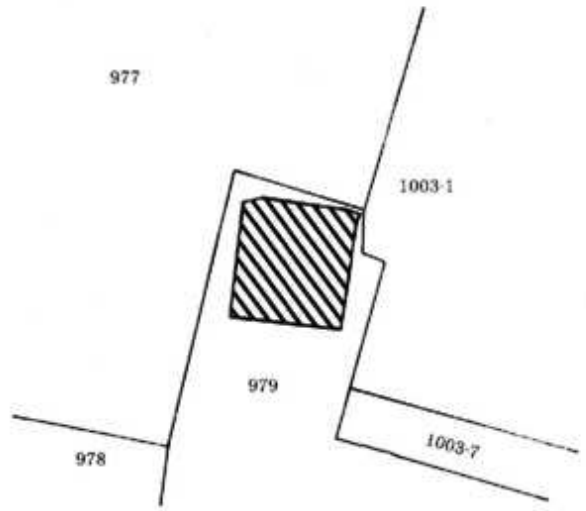
遺　構　　竪穴住居址（弥生）３軒　堀立柱建物址（平安）１軒　土坑６基　ピット３基
遺　物　　縄文土器　弥生土器（壺・甕・高坏・鉢・蓋）　須恵器（坏・甕・蓋）
　　土師器（坏・甕）



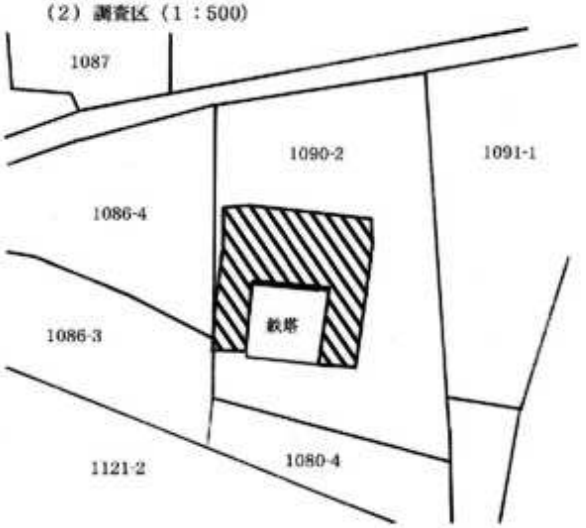
第5図　戸坂遺跡Ⅲ　概略図（1：4,000）



（1）調査区（1：500）



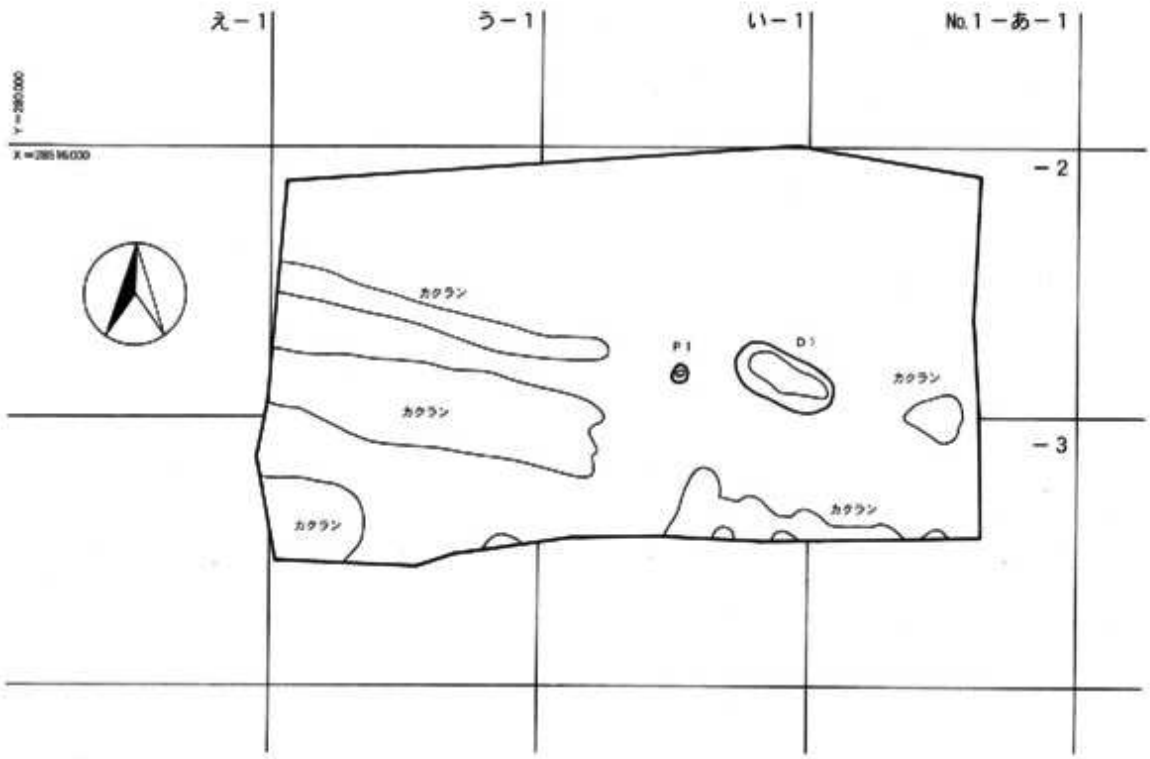
（2）調査区（1：500）



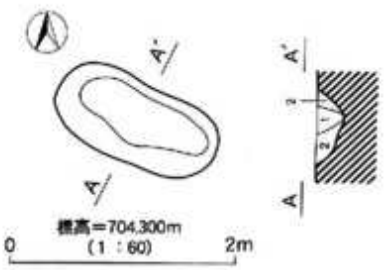
（3）調査区（1：500）

第２章　遺構と遺物

第１節　No.１調査区



第６図　No.１調査区　全体図（１：100）



Ｄ１号土坑　土層説明

1．暗褐色土(10yr3/4)　軽石を含む。
2．褐色土(10yr4/6)　軽石を含み、地山ロームが混入する。

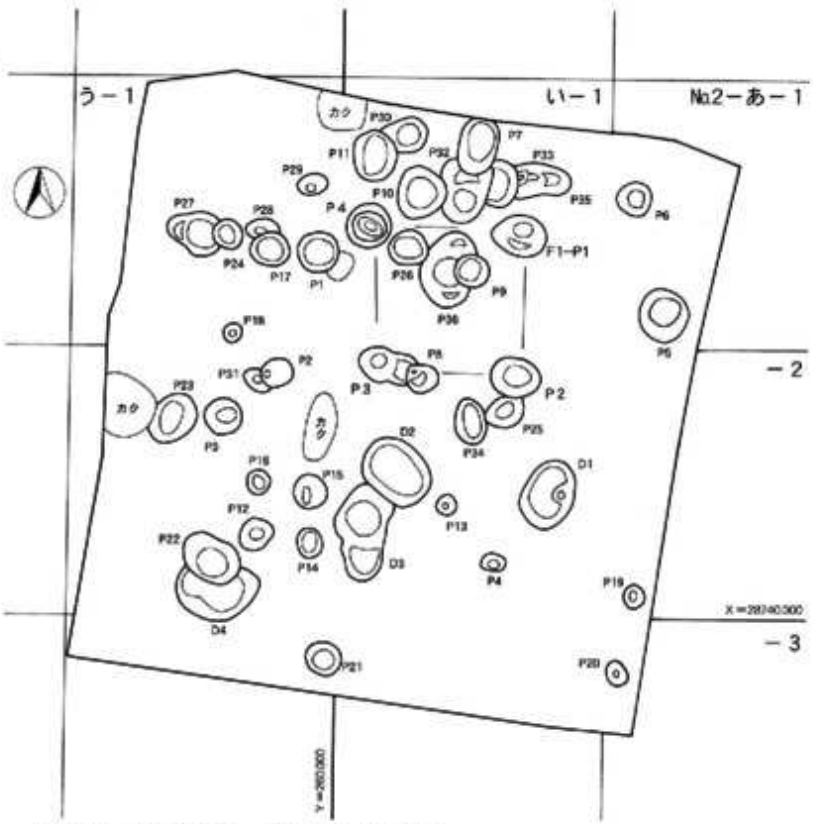
第７図　Ｄ１号土坑実測図

３箇所の調査区のうち、南側のNo.22鉄塔建替に伴い設定された調査区である。戸坂遺跡の存在する台地の西側、田切り低地に接する台地西端部に位置している。調査の結果確認された遺構は土坑１基とピット１基のみであり、その他には後世の攪乱を認めた。

遺構からの出土遺物は認められなかったが、遺構検出時に須恵器の短頸壺と蓋、土師器甕などの破片を発見している。全て破片資料であるため正確な年代を得ることは難しいが平安時代、おそらく８世紀末から９世紀前半頃の所産と考えられる。

Ｄ１号土坑はあ・い－２グリッドに位置し平面形態楕円形を呈す。長軸長151cm、短軸長85cmを測り、深さは25cm。長軸方位はＮ－62°－Ｅを測った。出土遺物は認められず、遺構の時期知ることは出来ない。表採で確認された遺物の時期が当てはまるなら平安時代のものとなろうか。第７図、図版一を参照。

第２節　No.２調査区



第８図　No.２調査区　全体図（１：100）

No.20鉄塔建替に伴う調査区である。戸坂遺跡の存在する台地上中央の西端寄りに位置する。調査区の東側にはすでに発掘調査が行われている四ツ塚遺跡Ⅰ・Ⅱや供養塚遺跡Ⅰ・Ⅱがあり、古墳～奈良・平安時代の遺跡が認められている。

調査の結果確認された遺構は堀立柱建物址１軒と土坑４基、ピット36基である。遺構検出時に発見された遺物や、遺構内で確認された遺物を見ると、須恵器坏と甕、また土師器坏や甕の破片を認めた。出土した遺物の傾向として坏は土師器より須恵器のそれの方が多く、土師器甕の中には薄手の「武蔵甕」を少量伴う。出土遺物から窺える事は、概ねこの調査区において認められる遺物が奈良～平安時代初頭、８世紀前葉から９世紀初頭頃、四ツ塚遺跡や供養塚遺跡で認められた奈良時代の集落址と時期的に近似するということである。

Ｆ１号竪穴住居址（第９図・図版二）

あ・い－１・２グリッドに位置する。重複関係ではＰ25を切り、Ｐ８に切られる。１間×１間で規模は南北268cm東西288cmを測り、ピットの規模は径67cm～77cm、深さは38cm～50cmを測る。長軸方位はＮ－86°－W、Ｐ４で顕著な柱痕を確認する。

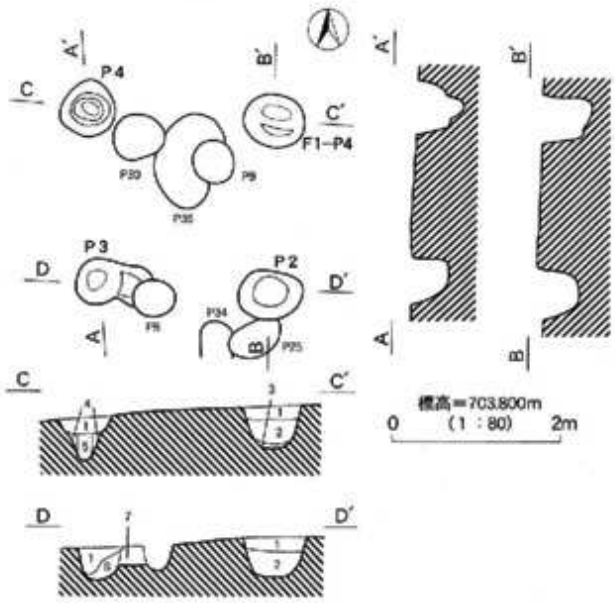
出土遺物はＰ２とＰ４で認められ、それぞれ土師器の甕と思われる胴部の破片である。うちＰ４のものは薄手の武蔵甕である。

Ｄ１～４号土坑（第９図・図版二）

Ｄ１～３はい－２、Ｄ４はう－２・３グリッドに位置する。Ｄ２・３は重複しＤ２の方が新しい。Ｄ４はＰ22に切られる。Ｄ１は楕円形、Ｄ２・４は隅丸方形、Ｄ３は多少形の歪んだ楕円形を呈する。規模はＤ１で長軸長105cm×短軸長76cm×深さ27cm、Ｄ２114×80×17、Ｄ３146×74×38、Ｄ４116×80×17を測る。長軸方位はＤ１Ｎ－５°－Ｅ、Ｄ２Ｎ－40°－W、Ｄ３Ｎ－９°－Ｅ、Ｄ４Ｎ－67°－W。

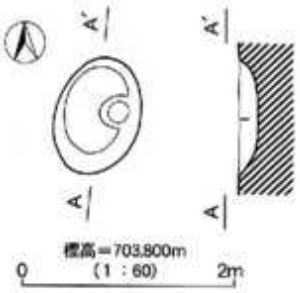
遺構内より遺物の出土は認められなかった。

Ｆ１号堀立柱建物址



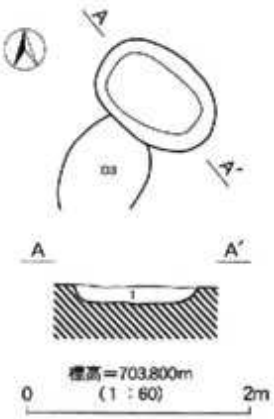
Ｆ１号堀立柱建物址　土層説明
1．黒褐色土(10yr3/2)　ローム粒子、パミスを微量に含む。
2．黒褐色土(10yr3/1)　ローム粒子を微量に含む。
3．黒褐色土(10yr2/2)
4．暗褐色土(10yr3/4)　ローム粒子を含む。
5．黒褐色土(10yr3/1)　粘質。ローム粒子を微量に含む。
6．黒褐色土(10YR3/2)　地山ロームブロックを多量に含む。
7．黒褐色土(10yr3/3)　ローム粒子を含む。

Ｄ１号土坑



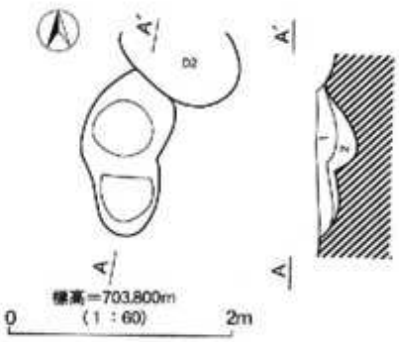
Ｄ１号土坑　土層説明
1．にぶい黄褐色土(10yr4/3)　パミス、ローム粒子を少量含む。

Ｄ２号土坑



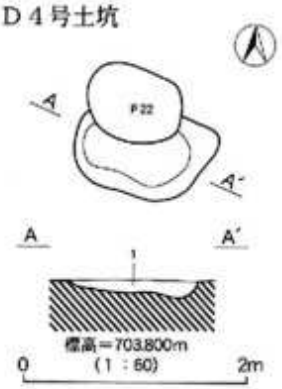
Ｄ２号土坑　土層説明
1．にぶい黄褐色土(10yr4/3)
パミス、ローム粒子を少量含む。

Ｄ３号土坑



Ｄ３号土坑　土層説明
1．褐色土(10yr4/4)　軽石を少量含む。
2．黄褐色土(10yr5/6)　軽石を多く含み、ローム粒を多量に混入する。

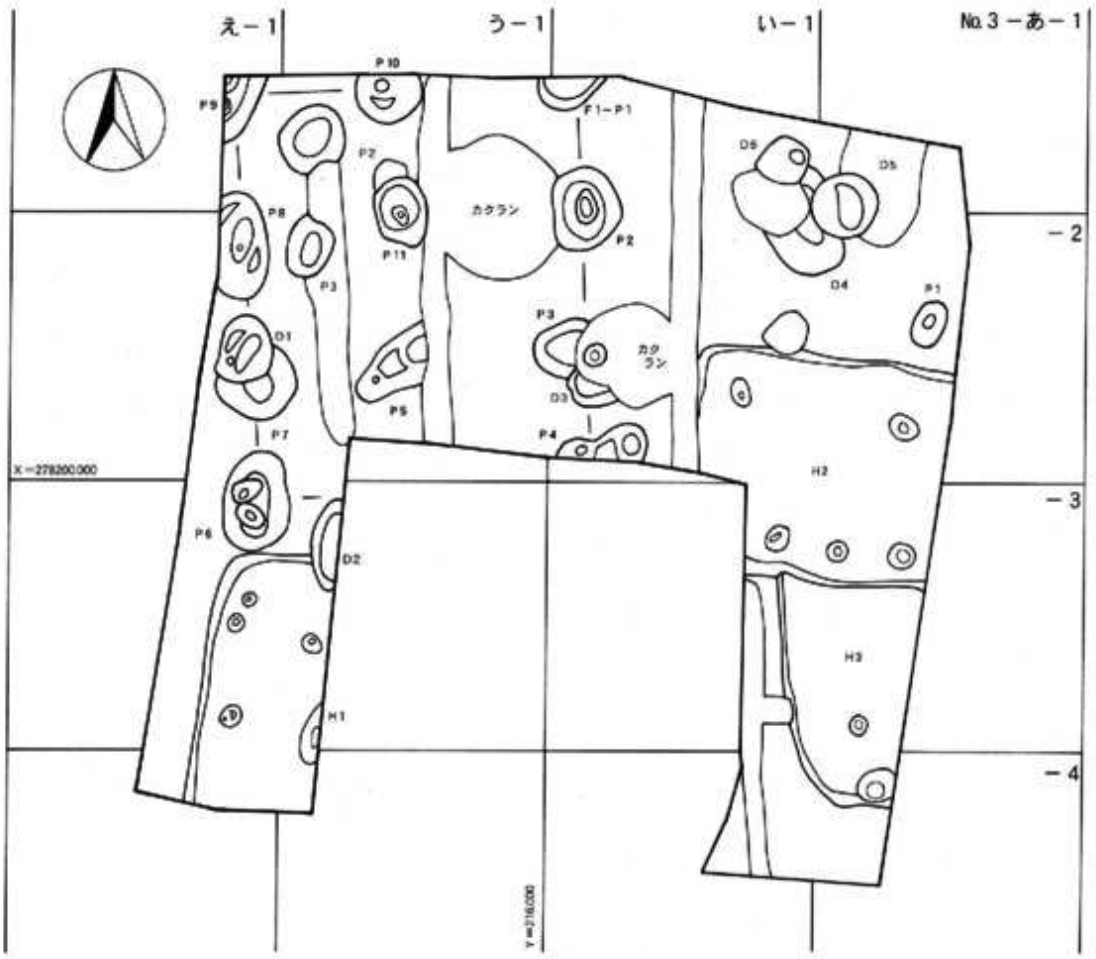
Ｄ４号土坑



Ｄ４号土坑　土層説明
1．褐色土(10yr4/4)　黒色土
ブロックが混入する。

第９図　Ｆ１号堀立柱建物址・Ｄ１～４号土坑　実測図

第３節　No.３調査区



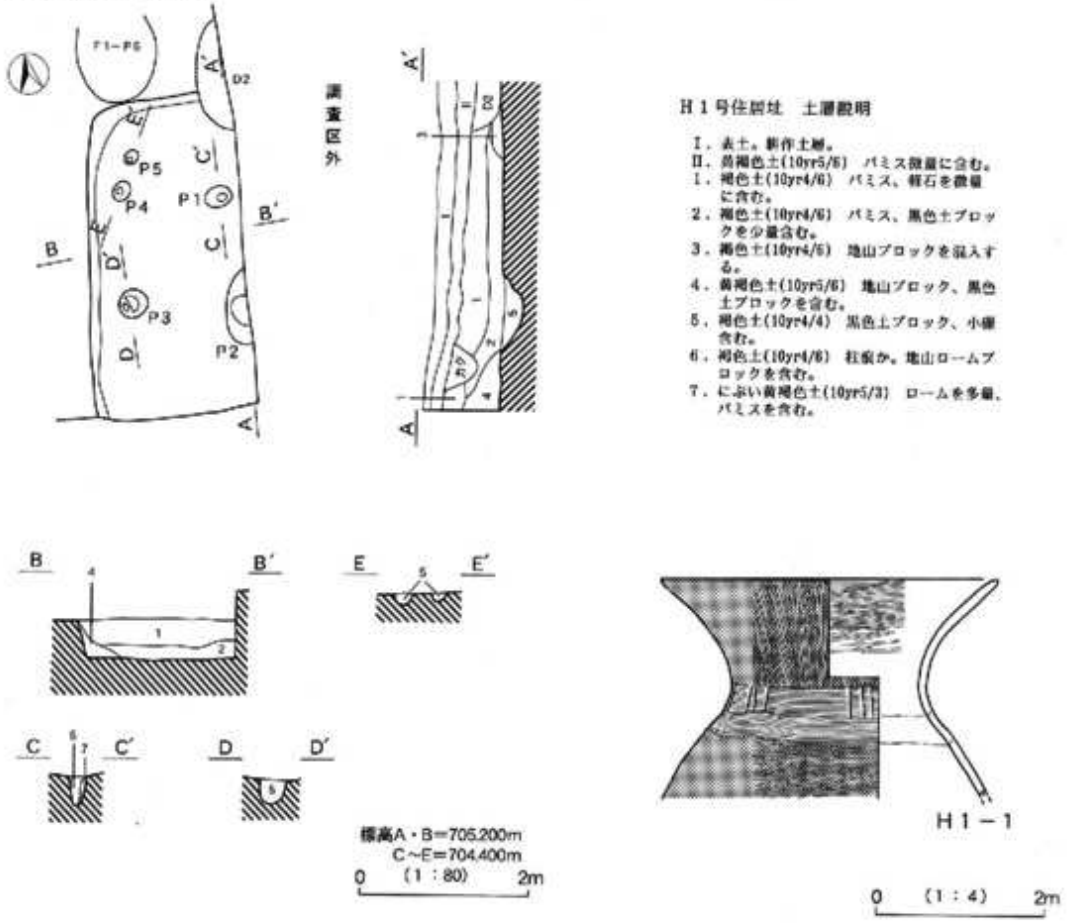
第10図　No.３調査区　全体図（１：100）

No.18鉄塔建替に伴う調査であり、その調査区は鉄塔を取り囲むようにコの字型に設定されている。本調査区は台地上西側南端、香坂川を眼下に望むことが出来る断崖上に位置する。近辺では戸坂遺跡Ⅰ・Ⅱの発掘調査が行われており、縄文時代住居址、弥生時代後期の住居址や環濠、平安時代の住居址が確認されている。本調査区では、その周辺の様相と基本的に変わらない遺構・遺物が発見された。

今回の調査で確認されたのは竪穴住居址３軒と堀立柱建物址１軒、土坑６基にピット３基である。その他、覆土が浅いため耕作による攪乱が見られ、鉄塔のアースであるワイヤーロープを埋設した際の攪乱も認められる。

調査区では弥生土器と奈良・平安時代の土師器・須恵器が多く出土した。また少数ではあるが縄文土器も認められ、周辺の調査成果と合致する。

H１号竪穴住居址



第11図　H１号住居址　実測図

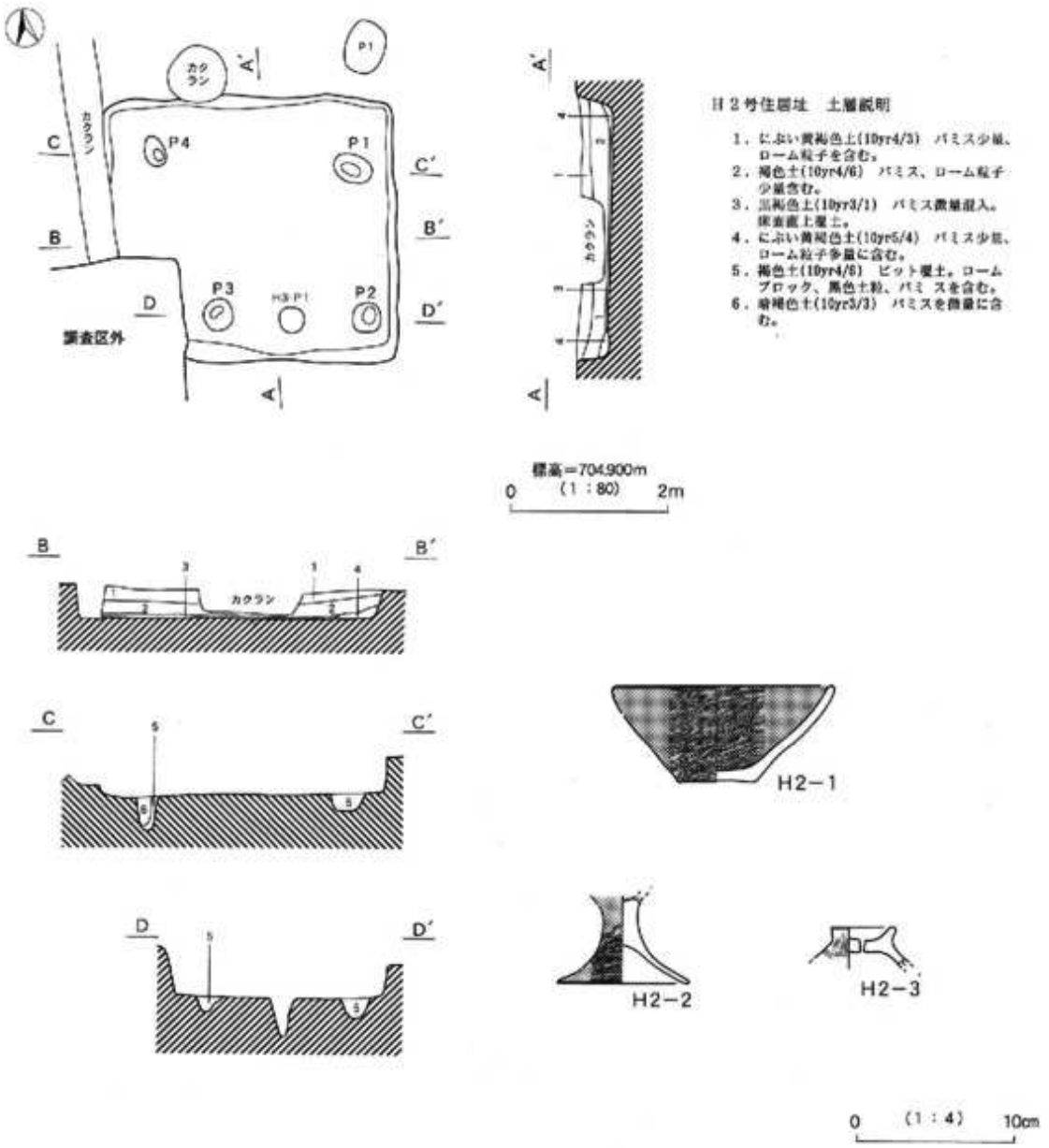
H１号竪穴住居址（第11図・図版三・六）

本住居址はう・え－３・４グリッドに位置し、東側と南側については調査区外となる。鉄塔から伸びるワイヤーによる攪乱が東西方向に走り、北壁でＤ２と重複する。新旧関係はＤ２の方が新しい。形態は方形であると思われる。規模は今回調査分で北壁長が120cm、西壁長358cm。調査された面積は5.58㎡を測り、長軸方位は西壁を基準としてＮ－10°－Ｅである。検出面からの壁高は45cmを測った。ピットは合計で５基確認されたが、明確に柱痕を持ち柱穴と考えられるのはＰ１のみである。覆土は自然堆積。掘り下げられた地山をそのまま床面としており硬化している。

遺構内から出土した遺物は弥生土器がほとんどである。覆土中からはごく少数だが平安時代のものと思われる土器片も認められたが、これは混入したものであろう。図示したのは西壁際Ｐ３のすぐ西脇から出土した壷１点である。口縁から胴部上方に掛けてが残存し外面を赤色塗彩、内外面にミガキが施される。頸部は３連止めの櫛描簾状文と、その下に櫛描横線文が施されている。

出土遺物は弥生時代後期後半にあたるものと思われ、住居址の時期も同様と考えられる。

H２号竪穴住居址



第12図　H２号竪穴住居址　実測図

H２号竪穴住居址（第12図・図版四・六）

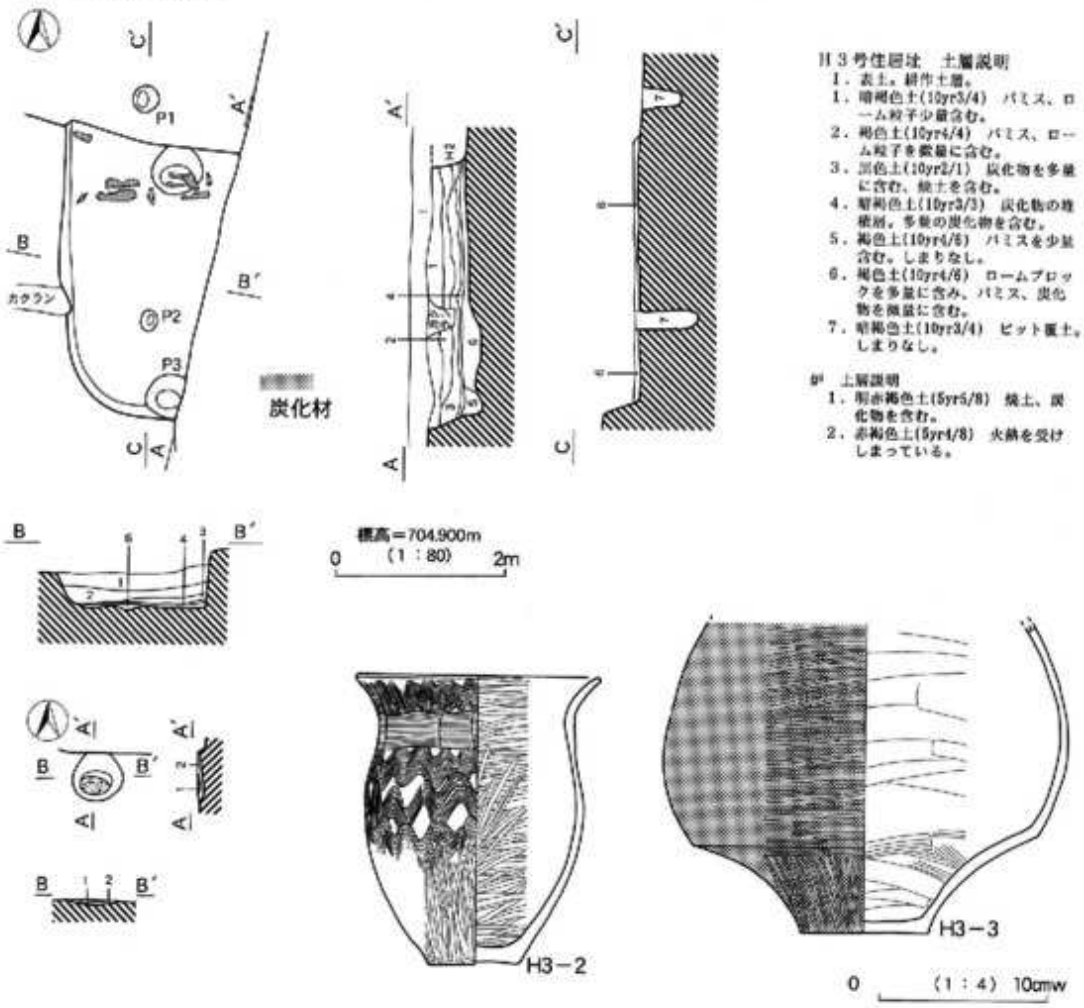
本住居址はあ・い－２・３グリッドに位置し、東壁部分と南西コーナー部分は調査区外のため未調査。西壁の一部をワイヤーの攪乱によって破壊され、住居址内もいくつか後世の攪乱を受けている。H３号竪穴住居址と重複し、新旧関係では本住居址の方が新しい。規模は北壁長368cm、東壁長321cm、

南壁は計測可能な部分で275cmを測った。調査された面積は9.74㎡、形態は東西に長い方形になると思われ、主軸方位はN－6°－Eである。検出面からの壁高は45cmを測った。ピットは4基を検出、柱穴と思われるのはP1・2・4の3基である。P2とP3の中間で認められたピットは本住居址が切るH3号竪穴住居址の主柱穴P1である。覆土は自然堆積。掘り下げられた地山をそのまま床面としており硬化している。

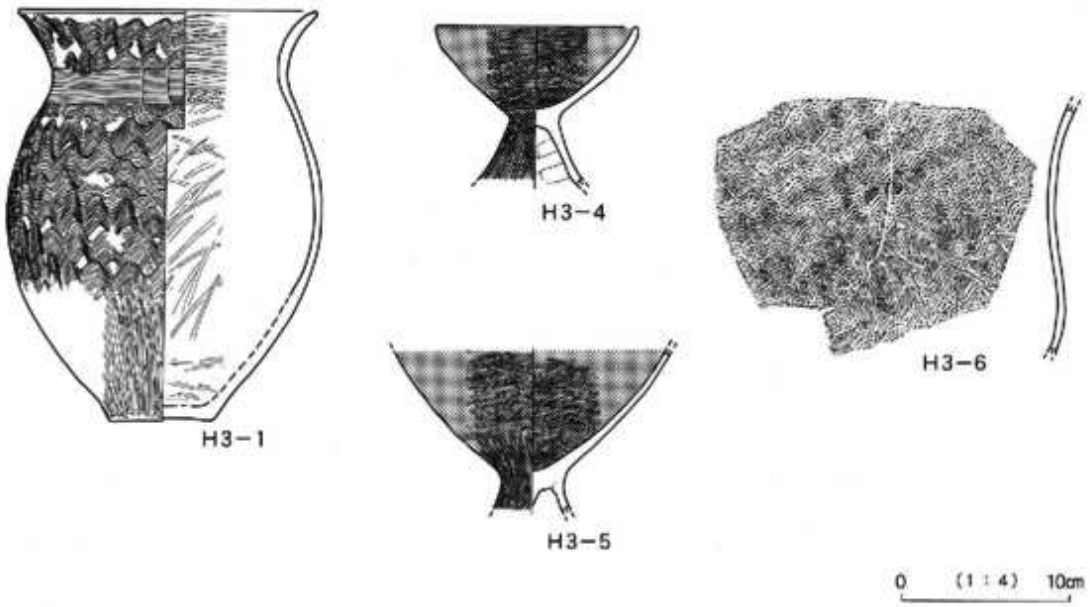
出土遺物について3点を図示する。その全てが弥生土器であり、1は鉢。床面直上での出土。内外面にミガキと赤色塗彩が施される。2は高坏。坏部が欠損した状態で覆土中より出土。外面及び坏部内面に赤色塗彩。脚部外面はミガキ、内部にはナデが施される。3は蓋。上部のみ残存する。覆土中からの出土。内面にナデ、外面はハケ目のちミガキ。中央に蒸気孔が残っている。

出土遺物は弥生時代後期後半にあたるものと思われ、住居址の時期も同様と考えられる。

H3号竪穴住居址



第13図 H3号竪穴住居址 実測図



第14図　H３号竪穴住居址　出土遺物

H３号竪穴住居址（第13、14図・図版四・六）

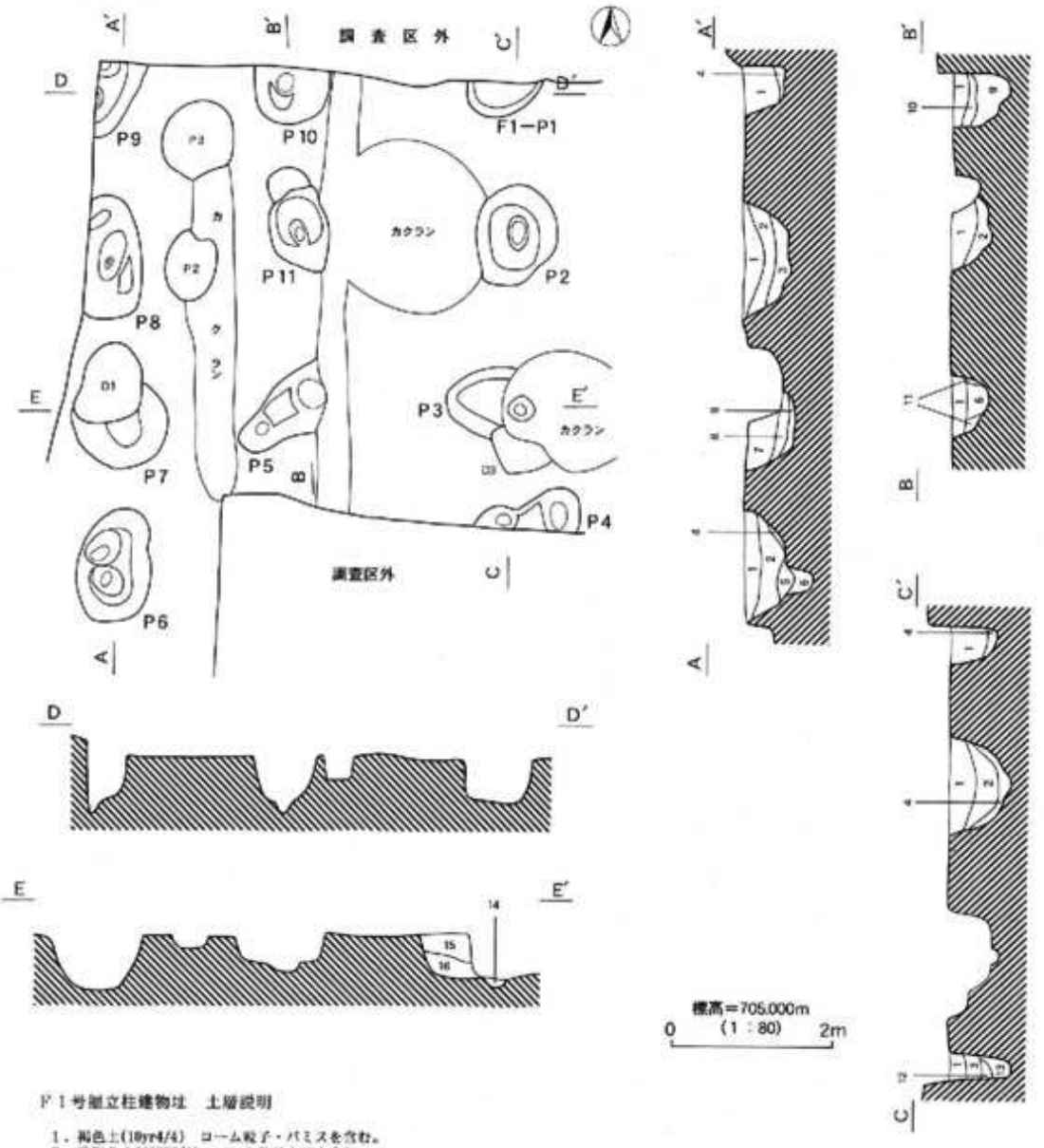
本住居址はあ・い－３・４グリッドに位置し、住居址東側は調査区外のために未調査、北壁ではH２号竪穴住居址と重複し、新旧関係は本住居址の方が古い。また東西に走るワイヤーの攪乱により西壁の一部に破壊を受けている。規模は調査部分で南壁114cm、西壁310cmを測り得るのみであり、その規模、形態は明らかではない。調査部分の床面積は4.86㎡、主軸方位は西壁でＮ－５°－Wであり、検出面からの壁高は35cmを測った。ピットは３基を認めるが、うち柱穴と思われるのはＨ２号竪穴住居址に切られて検出されたＰ１とＰ２である。床には貼床が認められ住居址南側の方が深く掘り込まれている。炉は主柱穴で見ると住居址の中央よりやや北西よりで確認された。規模南北56cm×東西61cmの地床炉で円形を呈し、北側はＨ２号竪穴住居址に一部切られる。覆土は自然堆積によるものだが、３層と床直上の４層には多量の炭化物を含み、炭化材も確認している。本住居址は所謂焼失住居であると考えられる。

遺物は６点を図示した。図示したもの以外にも弥生土器の破片を多く出土し、中には縄文土器の破片も認められた。戸坂遺跡Ⅱにおいて縄文時代の住居址が調査されていることから、台地上の調査区近辺に縄文時代の集落が存在しているのだろう。

１・２は甕。２は１に比して小型で、いずれもほぼ完形の状態での出土。焼失住居ではよく見られるがいずれの遺物もその残存状態は良好である。ともに口縁から胴部に掛けて櫛描波状文、頸部には櫛描簾状文を施す。胴部下方はミガキ、内面はヘラミガキ。３は壺。胴部下方に最大径を持つ弥生時代後期後半における典型的な形状を持つ。外面には赤色塗彩。ミガキを施し内面はハケナデ。４・５は高坏。共に脚部下方を欠損し、５は坏部上方も欠損する。坏部と脚部外面に赤色塗彩、共にミガキが施されている。６は甕の胴部の破片実測。櫛描波状文が施される。

出土遺物は弥生時代後期後半にあたるものと思われ、住居址の時期も同様と考えられる。

F１号堀立柱建物址



F１号堀立柱建物址　土層説明

1．褐色土(10yr4/4)　ローム粒子・パミスを含む。
2．暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子少量を含む。
3．にぶい黄褐色土(10yr4/3)　パミスを少量含む。
4．黄褐色土(10yr5/6)　地山ブロックを多く含む。
5．褐色土(10yr4/4)　地山ロームブロックを含み、しまりなし。
6．暗褐色土(10yr3/4)　柱痕。
7．黒褐色土(10yr3/2)　ローム粒子、ブロックを含む。
8．黒褐色土(10yr2/3)　ローム粒子・パミス少量を含む。
9．褐色土(10yr4/4)　ローム粒子を多量に含む。
10．黒褐色土(10yr2/3)　パミスを含む。
11．にぶい黄褐色土(10yr6/4)　ローム粒子を多量、パミスを含む。
12．にぶい黄褐色土(10yr5/4)　ローム粒子・パミスを多量に含む。
13．にぶい黄褐色土(10yr6/4)　地山ロームを多量に含む。
14．褐色土(10yr4/6)　ローム粒子を含む。
15．黄褐色土(10yr5/6)　炭化物が微量に混入。
16．明黄褐色土(10yr6/8)　地山ロームを含む。

第15図　F号掘立柱建物址　実測図

Ｆ１号掘立柱建物址（第15図・図版五）

本遺構はい・う・え－１・２・３グリッドに位置し、Ｐ３でＤ３号土坑、Ｐ７でＤ１号土坑とそれぞれ重複し、新旧関係ではいずれも本遺構の方が古い。またＰ２、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ11で攪乱による破壊を受け、南北及び西側において調査区外に抵触する。柱穴規模は109cm～153cm、深さは49cm～85cmを測り、３間×２間の総柱式であり、規模は桁行698cm（調査部分のみ）×梁間613cmとなった。調査区外においておそらくＰ４－Ｐ６列の柱が存在すると考えられる。Ｐ１、Ｐ４、Ｐ６、Ｐ９を四方とした遺構の面積は28.1㎡を測り、長軸方位はＮ－３°－Ｗを示した。Ｐ２、３、６、８、９、10、11で柱痕とおぼしき痕跡を認めている。規模の大きな掘立柱建物址であり、その柱穴の規模も深さも大きい。その理由として考えられるのは当地の土壌の問題であり、水はけが良く柔らかで、地盤として脆弱な当地において大規模な総柱の建造物を造ろうとした場合、それを支えるためにはおそらくこの程度の柱穴を必要としたのだろう。

柱穴内から出土した遺物に図示出来るものはない。赤色が施された弥生土器片や、土師器坏、須恵器甕、坏、蓋の破片などが出土しており、須恵器などは８世紀後葉から９世紀前葉の様相を持つものが認められる。本遺構の営まれた時期は、平安時代に当たると考えられる。

Ｄ１号土坑（第16図・図版五）

え－２グリッドに位置する。Ｆ１号掘立柱建物址Ｐ６と重複しこちらの方が新しい。円形を呈し、規模は長軸長106cm、短軸長85cmを測る。検出面からの深さは48cm、長軸方位はＮ－37°－Ｅを示した。

出土遺物は認められなかった。

Ｄ２号土坑（第16図・図版五）

う－３グリッドに位置する。Ｈ１号竪穴住居址と重複しこちらの方が新しい。東側半分は調査区外である。楕円形を呈し、規模は長軸長133cm、短軸長は調査部分のみで33cmを測る。検出面からの深さは30cm、長軸方位はＮ－１°－Ｅでほぼ真北を示す。

出土遺物は須恵器坏を図示する。覆土中からの出土でロクロナデ、底部は回転糸切り痕が残る。この須恵器は９世紀前半の所産と思われる。

Ｄ３号土坑（第16図・図版五）

い－２グリッドに位置する。攪乱により土坑のおよそ半分以上は失われている。またＦ１号掘立柱建物址Ｐ３と重複し、こちらの方が新しい。隅丸方形、おそらく東西に長い形状を呈すると思われ、規模は計測出来る限りでは長軸長48cm、短軸長60cmを測る。検出面からの深さは28cm、長軸方位はＮ－32°－Ｅを示した。

出土遺物は認められない。

Ｄ４号土坑（第16図・図版五）

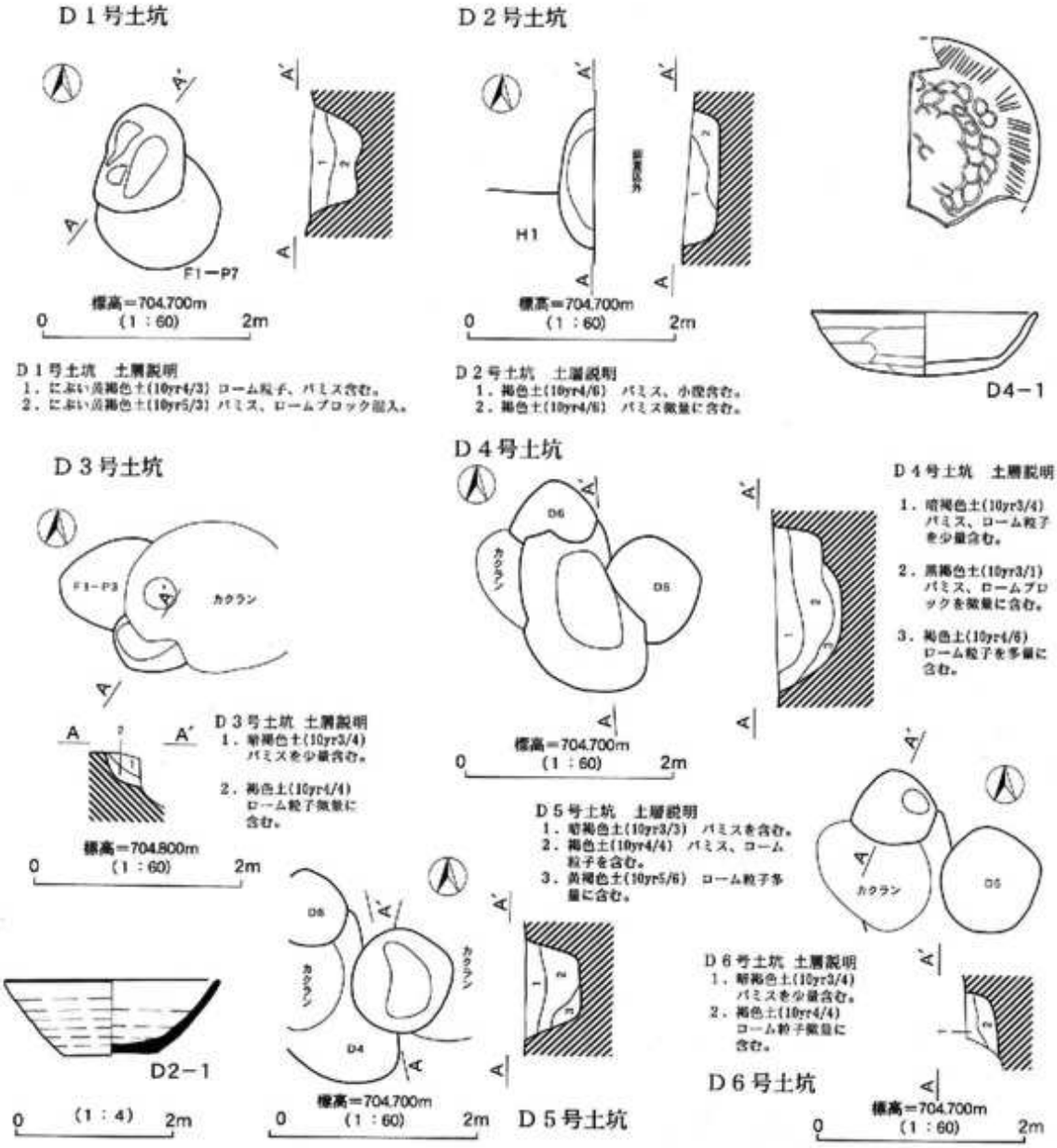
あ・い－１・２グリッドに位置する。攪乱、及びＤ５・６号土坑と重複し、いずれもこちらの方が古い。隅丸方形を呈し、規模は検出部分のみで長軸長142cm、短軸長110cmを測った。検出面からの深さは73cm、長軸方位はＮ－19°－Ｗを示す。

土師器坏を１点図示する。口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリで調整され内部には機内系暗文が施される。坏は平安時代、８世紀後葉の所産と思われる。

Ｄ５号土坑（第16図・図版五）

あ・い－１・２グリッドに位置する。Ｄ４号土坑と重複し、こちらの方が新しい。また、攪乱による破壊を受ける。円形を呈し、規模は径98㎝を測る。検出面からの深さは54㎝である。

出土遺物は認められない。



第16図　Ｄ１～６号土坑実測図　出土遺物

Ｄ６号土坑（第16図・図版五）

い－１グリッドに位置する。Ｄ４号土坑と重複し、こちらの方が新しい。円形を呈し、規模は長軸長82cm、短軸長73cmを測った。検出面からの深さは66cm、長軸方位はＮ－81°－Ｅである。

遺物は認められなかった。

戸坂遺跡Ⅲ　遺構一覧表・遺物観察表

○竪穴住居址

調査区	遺構名	形態	規模（m, cm）						主軸方位	床の状態	備　考
			面積	北壁	東壁	南壁	西壁	壁高			
No.3	Ｈ１	（方形）	(5.58)	(120)	－		(358)	45	N-10°-E	貼床無し	Ｄ２に切られる。
	Ｈ２	方形	(9.74)	368	321	(275)	－	45	N-6°-E	貼床無し	Ｈ３を切り、攪乱に切られる。
	Ｈ３	（方形）	(4.86)	－	－	(114)	(310)	35	N-5°-W	やや硬質	Ｈ２に切られる。火災住居。

○掘立柱建物址

調査区	遺構名	規　模（cm・m）						長軸方位	備　考
	桁×梁	規模	桁行柱間	梁間柱間	P径	P深さ	面積		
No.2	Ｆ１	１×１	258×288	104～150	146～148	67～77	38～50	6.0	N-86°-W	P25を切り、Ｐ８に切られる。
No.3	Ｆ１	３×２	(698)×613	50～101	110～170	109～153	49～85	28.1	N-3°-W	総柱式。Ｄ１、攪乱に切られる。

○土坑

調査区	遺構名	位　置	形態	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	備　考
No.1	Ｄ１	あ・い－２	楕円形	151	69	25	N-62°-E	
No.2	Ｄ１	い－２	楕円形	105	76	27	N-5°-E	
	Ｄ２	い－２	隅丸方形	114	80	17	N-40°-W	Ｄ３を切る。
	Ｄ３	い－２	不整楕円	146	74	38	N-9°-E	Ｄ２に切られる。
	Ｄ４	う－２・３	隅丸方形	116	80	17	N-67°-W	Ｐ22に切られる。
No.3	Ｄ１	え－２	円形	106	85	48	N-37°-E	Ｆ１-Ｐ６を切る。
	Ｄ２	う－３	楕円形	133	(33)	30	N-1°-E	Ｈ１を切る。須恵器杯出土。
	Ｄ３	い－２	隅丸方形	(48)	(60)	28	N-32°-E	Ｆ１-Ｐ３を切り、攪乱に切られる。
	Ｄ４	あ・い－１・２	隅丸方形	(142)	(110)	73	N-19°-W	Ｄ５・６、攪乱に切られる。土師器杯出土
	Ｄ５	あ・い－１・２	円形	98	98	54	－	Ｄ４を切る。攪乱に切られる。
	Ｄ６	い－１	円形	82	73	66	N-81°-E	Ｄ４を切る。

○遺物観察表

調査区	遺構名	No.	器　種	器　形	計測値（cm）			調　整・成　形		備　考
					口径	底径	器高	内　面	外　面	
No.3	Ｈ１	1	弥生土器	壷	20.0	－	(13.0)	ミガキ	ミガキ・頸部櫛描簾状文	赤色塗彩
	Ｈ２	1	弥生土器	鉢	14.1	4.8	6.1	ミガキ	ミガキ	赤色塗彩
		2		高坏	－	8.3	(5.5)	ミガキ・脚部ナデ	ミガキ	赤色塗彩
		3		蓋	4.1	－	(2.6)	ナデ	ハケ目→ミガキ	
	Ｈ３	1	弥生土器	甕	17.8	6.1	24.4	ヘラミガキ	体部波状文・頸部簾状文	
		2		甕	14.5	5.4	17.1	ヘラミガキ	体部上波状文,下ミガキ,頸部簾状文	内外にスス付着
		3		壷	－	7.6	18.4	ハケナデ	ミガキ	外面赤色塗彩
		4		高坏	12.0	－	(9.6)	ミガキ・脚部ナデ	ミガキ	赤色塗彩
		5		高坏	－	－	(9.9)	ミガキ	ミガキ	赤色塗彩
		6		甕	－	－	－	ミガキ	櫛描波状文	破片実測
	Ｄ１	1	須恵器	坏	13.7	6.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ・底部回転糸切り	
	Ｄ４	1	土師器	坏	14.4	9.0	4.1	暗文	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ	

○ピット

調査区	No.	位置	形態	径	深	土　　説	備　　考
No.1	1	い－2	円形	24	30	10yr3/3	
No.2	1	う－1	円形	65	48	10yr3/2 パ・ロ含む。	→攪。土・須破片出土。
	2	う－2	隅丸方形	44	48	10yr3/2 パ微量含む。	→P31。
	3	う－2	円形	52	15	10yr4/3 パ・ロ含む。	
	4	い－2	円形	32	14	10yr3/2 ロ微量含む。	
	5	あ－1	円形	77	51	10yr3/1 ロ微量含む。	須坏、土製出土。
	6	あ－1	円形	48	22	10yr3/2 ロ微量含む。	
	7	い－1	楕円形	87	51	10yr3/2 ロ微量含む。	→P32。柱痕あり。須・土製出土。
	8	い－2	円形	52	48	10yr3/3 ロ微量含む。	→F1-P3
	9	い－1	円形	48	45	10yr3/2 ロ少量含む。	→P36。土製出土。
	10	い－1	円形	76	44	10yr3/1	→P32。柱痕あり。須坏出土。
	11	い－1	円形	72	18	10yr4/3 ロ多量含む。	→P30。
	12	う－2	円形	47	20	10yr4/4 パ・ロ含む。	
	13	い－2	円形	34	20	10yr4/3 パ・ロ含む。	
	14	う－2	円形	44	20	10yr4/3 ロ含む。	
	15	う－2	隅丸方形	50	36	10yr4/3 パ・ロ含む。	
	16	う－2	円形	35	22	10yr4/4 パ・ロ含む。	
	17	う－1	隅丸方形	66	48	10yr3/1 パ微量含む。	→P28。
	18	う－1	円形	25	20	10yr3/3 ロ微量含む。	
	19	あ－2	円形	31	26	10yr3/2 ロ微量含む。	
	20	あ－3	円形	32	26	10yr3/2 ロ微量含む。	
	21	い・う－3	円形	46	24	10yr3/3 ロ微量含む。	須高台付坏、土破片出土。
	22	う－2	楕円形	86	47	10yr3/2	→D4。
	23	う－2	円形	69	47	10yr3/1 ロ微量含む。	攪→。土坏出土。
	24	う－1	円形	45	37	10yr4/1 ロ含む。	→P27。須坏出土。
	25	い－2	不整楕円	66	36	10yr3/4 ロ含む。	→P34。F1-P2→。
	26	い－1	円形	61	29	10yr3/4 ロ、軽石多量含む。	→P36。
	27	う－1	不整楕円	65	55	10yr3/4 ロ含む。	P24→。
	28	う－1	不整円	47	29	10yr4/4 パ含む。	P17→。
	29	う－1	円形	41	15	10yr4/4 パ含む。	
	30	い－1	隅丸方形	51	23	10yr3/4 軽石含む。	P11→。
	31	う－2	楕円形	44	34	10yr3/3 パ・ロ含む。	P2→。
	32	い－1	楕円形	(85)	41	10yr2/3 ロ少量含む。	→P33、P7・10→。
	33	い－1	隅丸方形	71	30	10yr3/3 パ少量含む。	→P35、P32→。
	34	い－2	楕円形	68	22	10yr4/4 パ含む。	P25→。
	35	い－1	楕円形	(75)	33	10yr4/6 パ微含む。	P33→。
	36	い－1	楕円形	110	75	10yr2/3 ロ含む。	P9・26→。須攪出土。
No.3	1	あ－2	楕円形	70	28	10yr3/4 パ微量含む。	須・土破片出土。
	2	う－2	楕円形	(80)	35	10yr3/2 パ少量含む。	攪→。弥破片出土。
	3	う－1	円形	94	40	10yr3/2 パ少量含む。	攪→。弥破片出土。

※各記号の意味　・パ　パミス　・ロ　ローム粒子　・○→　○に切られる　・→○　○を切る
・攪　攪乱　・弥　弥生土器　・土　土師器　・須　須恵器

第３章　まとめ

今回調査された３箇所の調査区について、その時期を明らかにし、戸坂遺跡の立地する台地上における集落の様相について考察したいと思う。

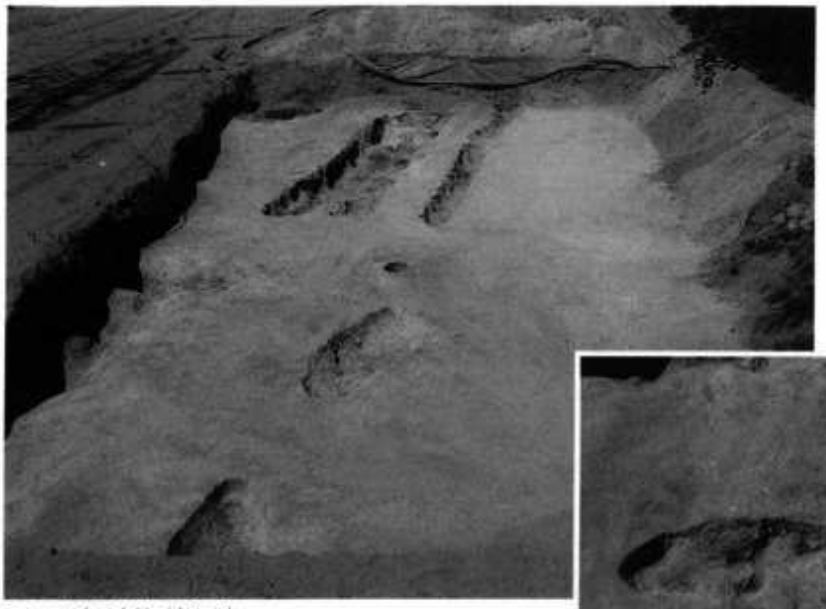
No.１調査区については検出時に確認された破片資料は平安時代、時期的にはおそらく８世紀末から９世紀前半頃のものと考えられる。田切りを挟んだ西側に所在する高師町遺跡Ⅱでは平安時代から中世にかけての集落址が確認されている。あくまで破片資料を遺構検出時に採集したと言うだけであるため断定は出来ないが、台地北側においては平安時代の集落が展開しているのではないかと考えられる。

No.２調査区で確認されたピット群や掘立柱建物址から出土した土器片はNo.１よりやや古い様相を持っていた。調査区の西側に隣接する四ツ塚、供養塚と言った遺跡では奈良時代に当たる集落址が認められており、本調査区の遺構はその集落址に関連するものである可能性がある。

No.３調査区で確認された住居址はその出土遺物から全て弥生時代後期後半に当たる住居址である。台地南側でのこれまでの調査でも同時期の遺構は確認されており、台地の南側縁辺付近に弥生時代後期の集落が営まれていたことは間違いないだろう。戸坂遺跡Ⅱで発見された溝状遺構が真実環濠であるのなら台地上に営まれた環濠集落の存在が示唆出来る。

また、それら住居址を切る形で確認された土坑は平安時代の遺物を伴い、掘立柱建物址もまた同様に平安時代の所産と思われる。出土遺物の坏の割合では土師器に比して須恵器の方が多く、須恵器蓋の破片の形状などから勘案し与えられる年代は８世紀末から９世紀前葉。新旧は遺物では掘立柱建物址の方が土坑より古相である。前述の戸坂遺跡Ⅰ・Ⅱの調査でも平安時代住居址が確認されている。

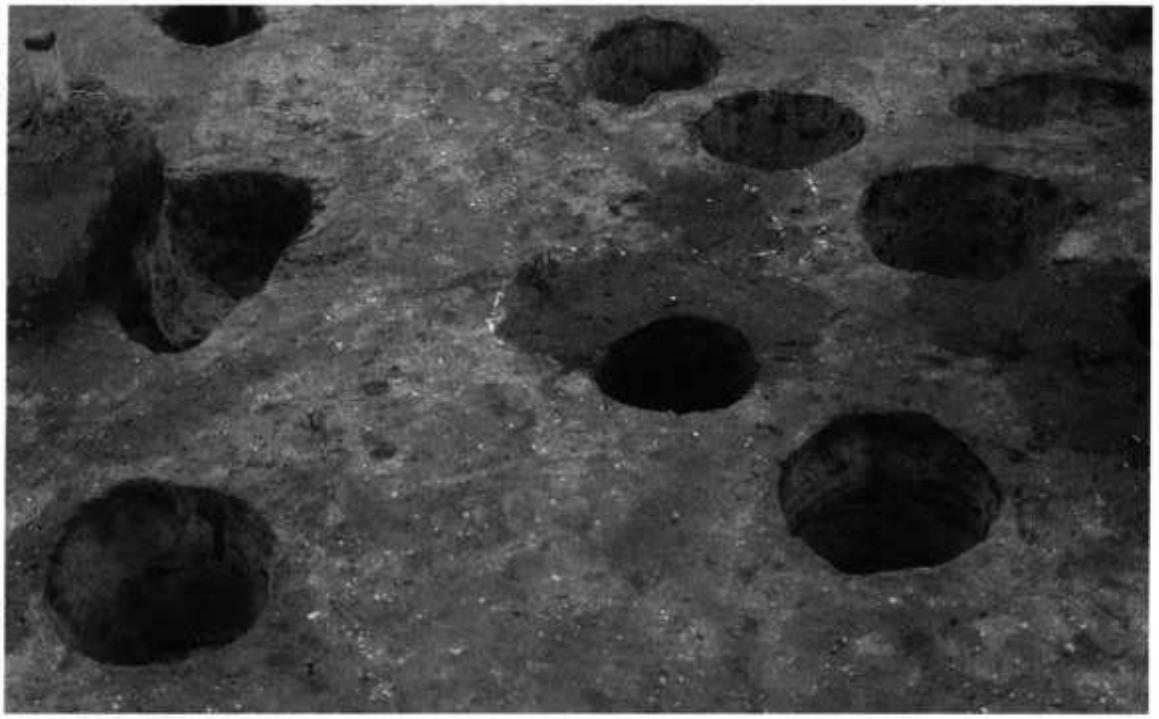
今回の調査によって、戸坂遺跡群内に所在する集落の時期的な変遷を追う資料が新たに付け加えられた。現在保育園などのある周辺を中心として奈良時代の集落址は台地のほぼ中央部分に展開し、弥生時代後期の集落址は台地のより南側縁辺に近く存在する。そして平安時代集落は台地上に広く分布しており、平安時代以降の当地の人口増加を窺わせるのである。



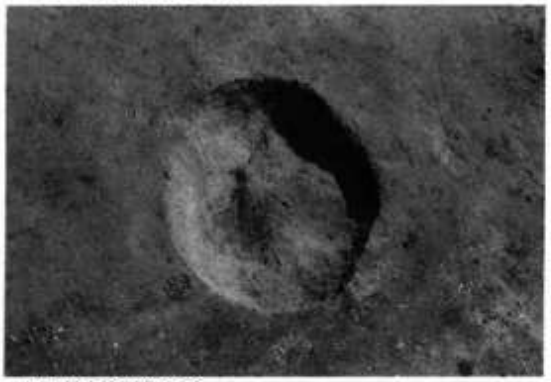
No.1 調査区全景（東から）

D1号土坑　P1（北から）

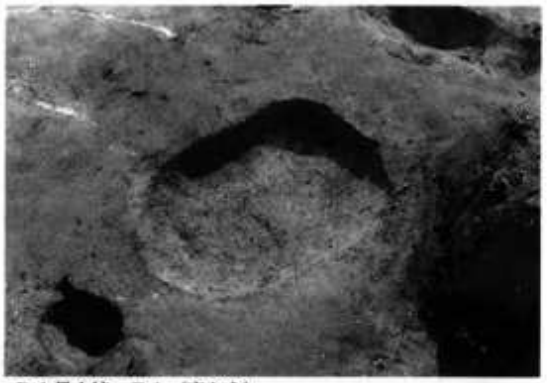
No.2 調査区全景（南から）



F１号堅立柱建物址（東から）



D１号土坑（北から）



D１号土坑　P１（東から）

D３号土坑（東から）

D４号土坑（東から）

No.3調査区全景（北から）

調査風景（北から）

H1号住居址、D　号土坑（北から）

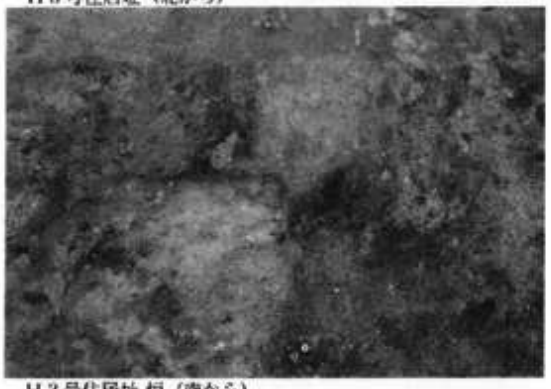
図版四

H２号住居址（東から）

H２号住居址 出土遺物（東から）

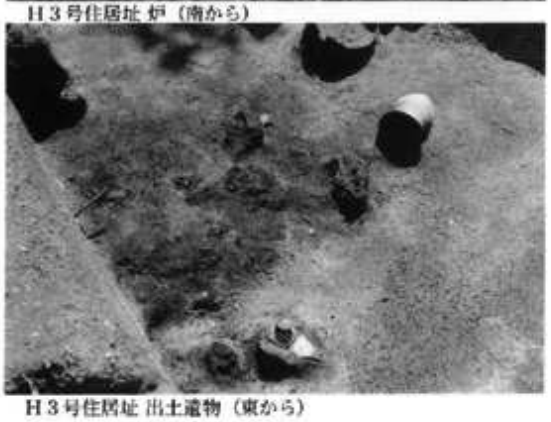
H３号住居址（北から）

H３号住居址 完堀（北から）



H３号住居址 炉（南から）

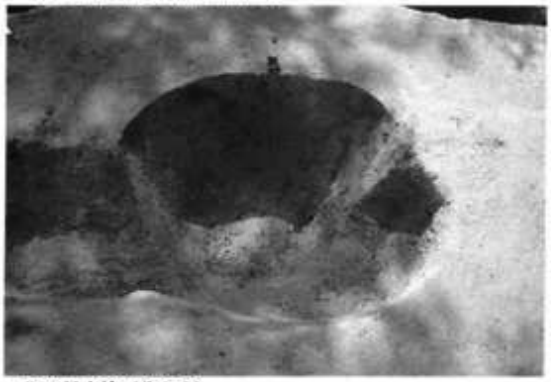
H３号住居址 出土遺物（東から）



H３号住居址 出土遺物（東から）

調査風景（東から）

F１号掘立柱建物址（北から）



D３号土坑（北から）

D４号土坑（北から）

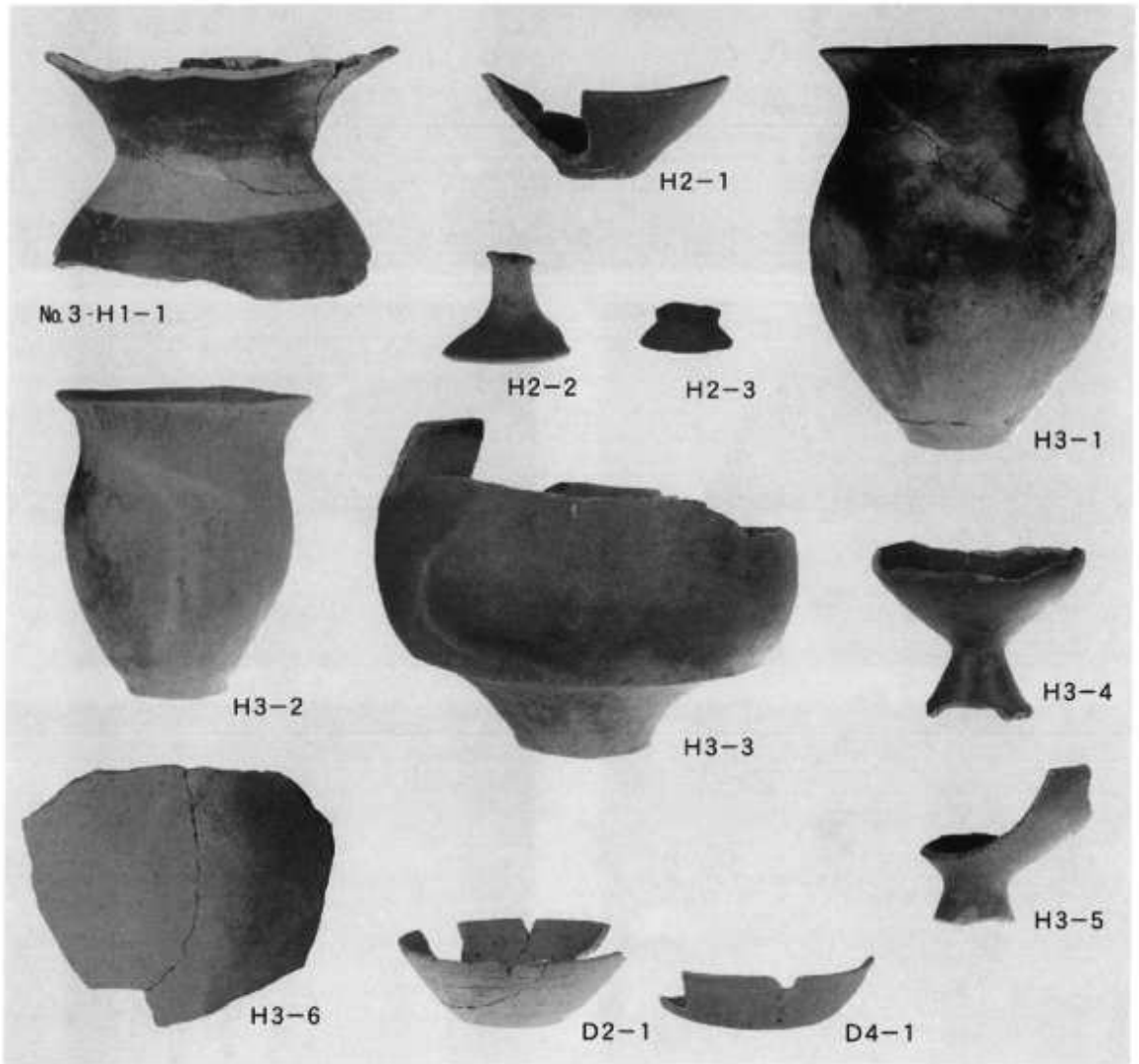
D５号土坑（東から）

D６号土坑（南から）

図版六

スナップ

戸坂遺跡群（浅間山を臨む）



戸坂遺跡Ⅲ 出土遺物

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第１２９集
戸坂遺跡 Ⅲ
２００５年２月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市大字中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市大字志賀5953
TEL　0267-68-7321
印刷所　キクハラインク　有限会社
〒385-0025　長野県佐久市大字塚原2285-1

報告書抄録

ふりがな	とさかいせきⅢ
書　名	戸坂遺跡Ⅲ
副書名	
巻　次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１２９集
編著者名	山澤　力
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	２００５０２
作成機関ＩＤ	
郵便番号	３８５－０００６
電話番号	０２６７－６８－７３２１
住　所	長野県佐久市大字志賀３９５３
ふりがな	とさかいせきぐん　とさかいせきⅢ
遺跡名	戸坂遺跡群　戸坂遺跡Ⅲ
ふりがな	ながのけんさくしおおあざあらこだあざみちばた９６１－１・ほしやばた９７９・とさか１０９０－２
遺跡所在地	長野県佐久市大字根岸字道端９６１－１・屋谷端９７９・戸坂１０９０－２
市町村コード	２０２１７
遺跡番号	２６３
北　緯	（１）０３６１５３５　（２）０３６１５２６　（３）０３６１５１５
東　経	（１）１３８２９５９　（２）１３８２９５８　（３）１３８２９５７
調査期間	２００４０７２６－２００５０２２８
調査面積	２６２．５３
調査原因	南佐久線No.15～25鉄塔建替工事
種　別	集落址
主な時代	弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中世
遺跡概要	竪穴住居址（弥生時代後期）　堀立柱建物址　土坑　ピット
特記事項	調査区は（１）～（３）の３箇所あり